

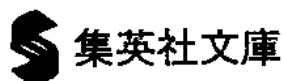
救命センター からの 手紙

ドクター・ファイルから

浜辺祐一



集英社文庫



救命センターからの手紙 ドクター・ファイルから

2001年3月25日 第1刷

定価はカバーに表示してあります。

2002年7月13日 第4刷

著者 浜 辺 祐 一

発行者 谷 山 尚 義

発行所 株式会社 集 英 社

東京都千代田区一ツ橋2-5-10

〒101-8050

(3230) 6095 (編集)

電話 03 (3230) 6393 (販売)

(3230) 6080 (制作)

印刷 中央精版印刷株式会社 株式会社美松堂

製本 中央精版印刷株式会社

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社制作部宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。

集英社文庫

救命センターからの手紙

ドクター・ファイルから

浜 辺 祐 一



蔵 書

救命センターからの手紙

ドクター・ファイルから
❖ 目次

I

救命センターからの手紙

10

エンゼルセット

19

告知

37

植物人間

72

葛藤

122

II

大往生

152

当直明け

169

身元不明

186

自己決定

203

善意

227

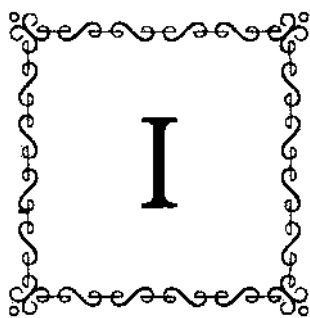
解説

小林和男

259

救命センターからの手紙

ドクター・ファイルから



救命センターからの手紙

前略

雨模様の夜です。

病院からほど遠くないところに住んでいる私の部屋の外を、救急車が、そのサイレンを街中に響かせながら、今宵も通り過ぎていきます。

雨の音に消されがちになりながらも、あの悲しげで、それでいて、どこか滑稽なピーポーという音が耳に残ります。

「また救命センターに担ぎ込まれるのだろうか、こんな雨の夜には、ひどい交通事故が多いから……」

どれ、二杯目の水割りのグラスは脇において、熱いコーヒーでも沸かすことにしましょう、ひよっとすると、いまの救急車の患者で呼びだされるかもしれませんから。

十分、二十分、電話のベルも鳴らず、ポケットベルも金切り声をあげません。

「やれやれ、酒盛りを続けてもよさそうかな」

三杯目のグラスに新しい氷を入れ、ウイスキーを注ごうとしたその時に、忌々しい電話が悲鳴をあげます。

そら、おいでなすった。

「先生、交通事故の患者です」

「年は？」

「^{はたち}二十歳過ぎといったところでしょうか」

「状態は？」

「ショック状態です、かなり出血しています」

「輸血は？」

「何とか確保できてますが、頭も腹も、手足もやられていて、手術の手が足りません」
「わかった、すぐ行くから手術室に入ってくれ」

冷めきってしまったコーヒ^さーを飲み干して、しばし天井を仰ぎます。

非番の日にも、おちおち酔っぱらってなんぞいられないわが身を恨んでいるのか、それとも、手術の手順を組み立てているのか、フーッと一つ溜息をつきます。

「よし、行くぞ」

誰に言うともなくつぶやきながら、傘を片手にドアを開け、外へ出ていきます。

手術が終わるころには、はたして、雨上がりのさわやかな朝、となっているのでしょうか。「この降りじゃあ、とても朝までには止みそうにねえな……」

『救命救急センター』、この言葉からあなたはいったいどんなことを想像されるのでしょうか。

いま流行の、テレビのドキュメンタリーに出てくるような一場面を思い浮かべるかもしれませんね。

例えばこんなふうに。

真夜中の首都高速道路。ゆるいカーブを曲がったところで、二台、三台と玉突き衝突による事故が発生。

現場には、既に何台ものパトカーと救急車がかけつけ、点滅する赤色燈が、まるでストロボのように事故現場を照らし出している。

運転席に閉じこめられ血塗れになったドライバーを、レスキュー隊が車外に引きずり出す。

苦痛で歪んだ顔に救急救命士の大声が飛ぶ。

「おい、しっかりしろ！ わかるな！」

傷病者を乗せた救急車は、救命救急センター目指して深夜の街をひた走る。

救急処置室に担ぎ込まれた患者のまわりを多くの医者がとり囲む。そして、そのまわりには手慣れた看護婦たちがてきぱきと動き回っている。

患者の頭からは血がしたたり落ち、折れた右足からは骨が飛び出している。処置室はさながら戦場のようになり、患者のまわりを怒声が飛び交う。

「急がないと間に合わないぞ！」

虫の息の患者は、初療を終え、慌ただしく手術室に運ばれていく。テレビカメラが、その後を小走りに追いかけていく。

場面は一転する。

間一髪、手術が間に合い、一命を取り留めた患者が、めでたく退院の日を迎える。

少し照れ気味の患者を真ん中において、そのまわりには得意顔の医者と、にこやかに笑顔を振りまく看護婦たちの、楽しそうに談笑している絵がアップになる。

そして、最新医学の勝利を誇るかのように、救命救急センターの遠景が、ドキュメンタリー最後の締めくくる……

こんな光景が、現実からかけ離れたことだとは決して申しますまい。しかし、残念ながら、そんな絵に画いたような話は、ほんの一握りしかないのです。

手術着に急いで着替えている私の、心の中に浮かんでくることは、最悪のことしかありません。

——間に合うだろうか、心臓が止まってしまう前に、体中の血液が流れ出してしまう前に、出血がコントロールできるだろうか

——また、術中死？　だとしたら、今年はこれで何人目になるんだっけ

——嫌だぜ、目の前でお母ちゃんに泣かれるなんてのは……

——ちらりとこのぞいた、手術室の前の家族待機室の様子が頭をかすめます。

——「そーいやあ、家族らしき人は誰もいなかったよな、きつとまだ、身元がわかってねえんだろ」

——「霊安室での涙のご対面でえのだけは勘弁してもらわないと……」

無影燈が煌々と照らし出す下で、手術はすでに始まっています。

「どうだ、具合は」

「ええ、なんとか間に合ってくればいいんですが……」

「血圧は？」

「かろうじて脈は触れています」

「瞳孔は？」

「それが……開いてるんですよ」

「わかった、開頭の方を急いでくれ、腹の出血は何とかするから」
突然、麻酔をかけていた医者が大声を出します。

「止まった、先生、心臓マッサージ！」

——やっぱり、ダメか……

『救命救急センター』とは、これまた大それた名前を頂戴してしまったものです。

何故ですか？

救命救急センターは、その名の通り、命にかかわる突然の病気や、大ケガの人たち、例えば心筋梗塞こうそくやクモ膜下出血、交通事故や転落、爆発事故の犠牲者などの、突発不測の患者に備えています。

かつて、こうした救急医療体制が不備であったために、何人もの患者が無駄に命を落としてしまった時代がありました。救命救急センターの登場が、福音をもたらしたことは間違いないことなのです。

そんな救命救急センターではあっても、しかし、そこに収容された患者の死亡率は三割を